指しているようにもみえる。実際、そのように開催目的を説明する主催者の人もいる。また、どの聖地をコースとしてピックアップするかに関して、聖地の霊位の高さや優越性など霊的観点から意見を言うイベント関係者もいる。単なるレクリエーションとしてのイベント以上の意味づけがなされていると考えられるのである。

従って、観光化は「本土化」の一部とみなせるものの、沖縄ではそれを自らの文化表象創出の機会と捉え、特に斎場御嶽(セーファークウタキ)のある南城市では、「スピリチュアリーテ」と従来の民俗宗教を接合させ、伝統的聖地巡拝慣習などを活用しながら、新たな聖地巡拝文化を生み出している。これは、観光文化の「沖縄化」ということができよう。

社会事業としての遺骨収集

——沖縄の戦死者の現在——

佐藤 壮 広

沖縄本島では現在、地域に根差した死者慣行と本土の流儀との間の葛藤や、双方の交差によって、市民参加型の新しいかたちの遺骨収集事業が展開しつつある。本発表ではこの事業を提案・推進している具志堅隆松という人物を事例として紹介し、当該社会のメンバーへ何がもたらされ、またそこにどのような葛藤があるかを概観し、現代沖縄の遺骨収集事業は生者と死者の双方にとっての「慰藉事業」としての意義をもつということを述べる。

遺骨収集活動を行ってきたボランティア団体「ガマフヤー」の代表・具志堅隆松氏は、土地造成中の那覇市真嘉比地区で、遺骨・遺品の収集作業を行っている。報告者は、遺骨収集を三〇年間にわたり行ってきた具志堅氏へのインタビューと、激戦地だった真嘉比地区の見学・訪問を通し、遺骨収集と雇用創出という二つの事業が結びついてくる現代沖縄社会の事情を調査した。その結果、次の二点が明らかになった。

一、戦後の沖縄の土地開発事業の過程で、多数の遺骨が、掘り起こされた盛土とともに、新しい街づくりや土地基盤整備などに再利用され続けてきたということ。那覇市真嘉比に隣接する那覇新都心地区は、沖縄戦の激戦地であり、五千人以上の戦死者が出た場所である。戦後、返還されたこの地区にはモノレールが通り、いまや大型ショッピングモール、美術館・博物館などが建ちならぶ活気ある都市空間となっている。開発工事の過程で掘り起こされ、発見されたはずの遺骨は、本人特定されないまま集められ、処分されてきた。厚生労働省の直轄事業となっていないはずの遺骨収集は、実情においては工事請負の土建業者に任せられ、工期遵守や開発優先の動きの中でその多くが適正に扱われてこなかった。

二、具志堅氏は、三〇年間、骨を拾いながら死者の「死」と向き合ってきたおり、その活動は「骨」をめぐる民俗としても真摯かつ持続力あるものである。沖縄の民俗文化において継承されてきた死者の「骨」に対する特別な感覚(沖縄文化において遺骨はフニシン「骨の神」「神となった骨」)は、死者の痕跡や生存のリアリティを再可視化する引き金になる。死者を不在

にし、彼らを過去化し、遺骨をモノ化するいわば近代知の枠組みのなかでは、「戦死者の骨を拾うことは、死者との対話だ」という言述それ自体が、レトリック以上の意味を持ちにくい。しかし、具志堅氏は、もの言わぬ遺骨の死の状況、死者の思いに迫ろうとする。そしてその死をもたらずに至った国家の暴力性、戦後も十分に遺骨収集を行う気概のない国の態度などを、遺骨収集の現場から穿つ。死者に関する適正な扱いを求めていく事業としての遺骨収集というビジョンが見てとれる。具志堅氏は、遺骨や遺品についた土を刷毛や筆などで丁寧に取り除き、当時の記録文書とも照合しながら死者の特定と遺族への遺骨の返還を行ってきた。二〇〇九年秋には、厚生労働省、沖縄県、那覇市にはたらきかけ、遺骨収集を公共事業にすることに成功した。ホームレスや生活保護の受給者らの就労支援となる「緊急雇用創出事業」として認可されたのである。

重機で掘り起こされる際にバラバラになる遺骨も多く、工事に現場に盛られた土の表面には胸や指や足の部位の遺骨が出ていることもある。具志堅氏は、その遺骨が分かるように、そこに小さな赤い旗の目印を付け、遺骨の行方を見続ける。六六年前に激しい戦いの中で死んでいった人間(の骨)が現在、収入もなく生きることに辛ささえ覚える人間を支えている。このように現代の沖縄では、遺骨収集と雇用問題がひとつの結節点を見せる。ここには、遺骨(死者の身体)を、市民の平和学習や、就労希望者の雇用創出へと活かしていく新しい社会デザインがある。その基盤には、骨を人間らしく扱うという「死者との倫理」を生きる意志および、「尊厳ある遺骨収集」の実現という

理想が見てとれるのである。

パネルの主旨とまとめ

村上興匡

本パネルは故鷲見定信教授を代表者とした二つの科研、①「沖縄における死者慣行の変容と「本土化」および②「沖縄死者慣行の現代的変容に関する地域研究——「本土化」と「沖縄化」の相互作用」を背景としている。①においては、現代沖縄、特に都市部において仏式葬儀慣習や葬祭業者の関わりなど、従来見られなかった本土的な死者慣行が急激に広まる一方で、家筋や墓地の意識などの伝統的要素が形を変えながら根強く残されていることが明らかになった。そこで②では、本土的慣習の普及を、単に移入にとらえず、本土的慣習と沖縄的慣習の相互作用にとらえる必要があると考え、沖縄から本土への移住者の本土文化受容との比較研究を行った。自らの社会的、文化的慣習を本土にあわせて新しい形を作り出すことを「沖縄化」とすると、死者慣行にとどまらず、今日の沖縄の社会や文化で起こっている変化の多くを「本土化」と「沖縄化」の相互作用としてとらえることが出来る。本パネルでは、葬儀および墓地、観光、遺骨収集活動の三つについて、「本土化」と「沖縄化」の相互作用をみる発題を行った。(発表内容については各発表要旨を参照)

コメントータの具志堅邦子氏からは、近代以降の沖縄の社会